

*** 三鷹移転の頃の東京天文台が登場する「新武蔵野物語」**

アーカイブ室新聞 (2010年7月9日 第360号) に「武蔵野の天文台」という記事を書いた。この「武蔵野の天文台」は「新武蔵野物語」の1節であることが判明した。そして「新武蔵野物語」を入手して、この中に「東京天文台」という1節があることを知り、399号 (2010年12月4日) に「新武蔵野物語に出てくる東京天文台」という記事を書いた。この「新武蔵野物語」には関東大震災後、三鷹に移転した頃の東京天文台の様子がよく書かれているので、古書店を通じてこの「新武蔵野物語」(写真1)を購入してパラパラめくっていると、なんと口絵写真に昭和初期の東京天文台の写真(写真2)が1枚あり、また目次に「東京天文台」と表記されていない説にも東京天文台に関する記述を見つけたので、再び筆をとっている次第である。

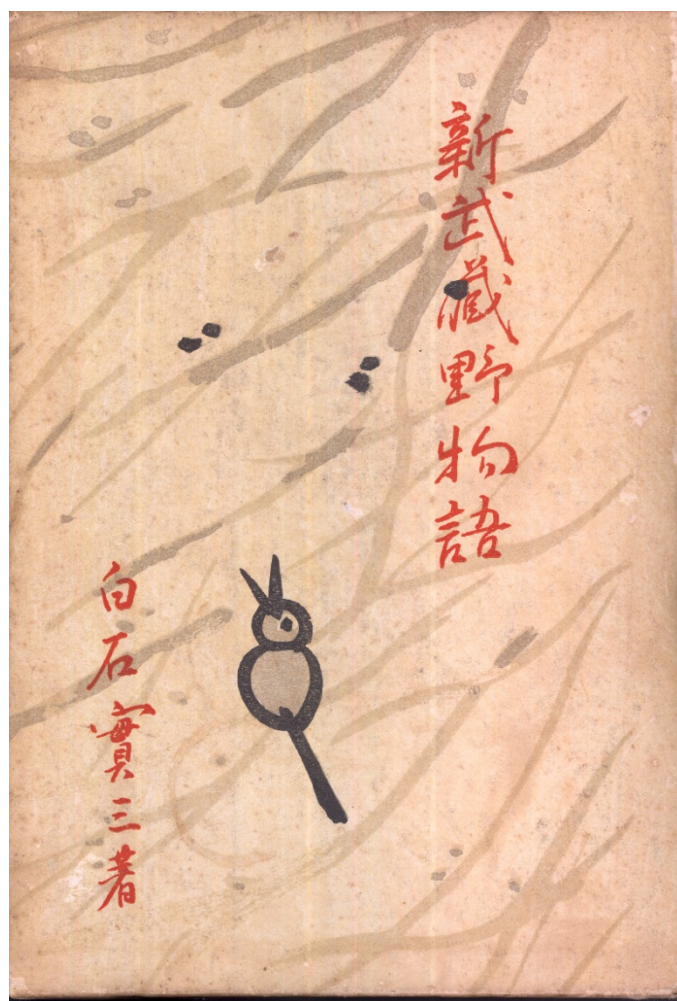


写真1 新武蔵野物語の箱

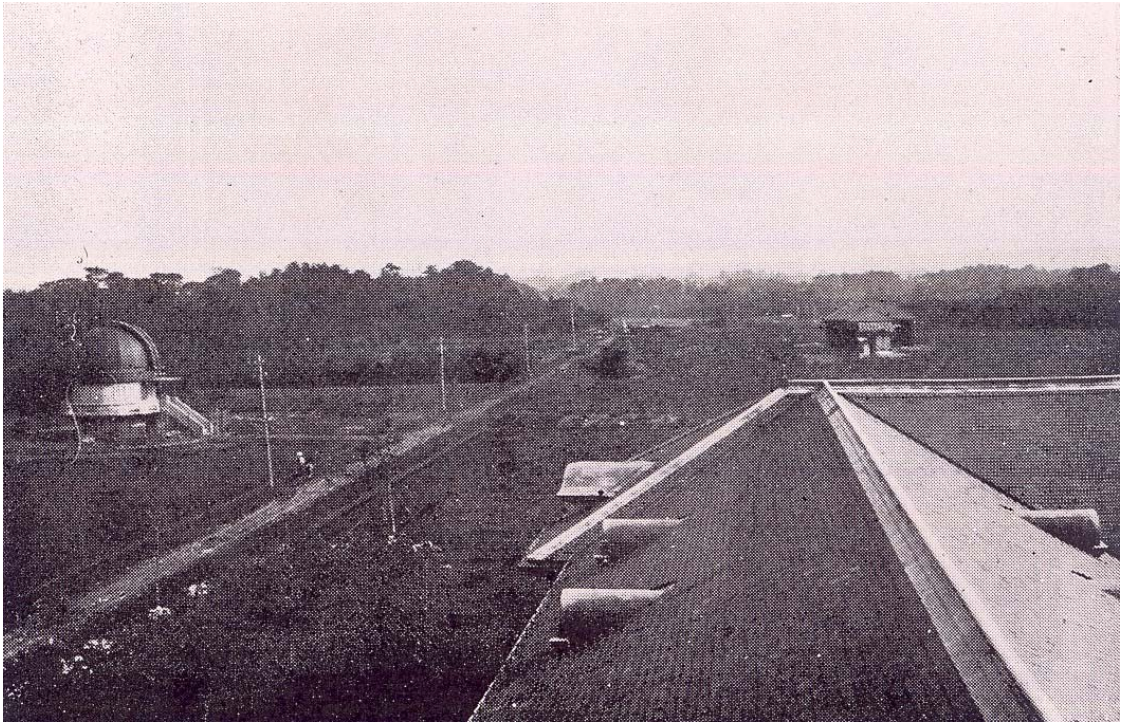


写真2 「新武蔵野物語」の口絵写真の東京天文台光景

写真2は、この「新武蔵野物語」の表現を借りれば、その本館の「露臺の上から」南南東方向を撮影したもので、本館の南翼棟の屋根と第1赤道儀室と太陽分光写真儀室が写っている。この写真は筆者が初めてみる当時の東京天文台の光景である。

また、「武蔵野の尾花」という1節に、東京天文台に関する記事が下記の用に記されている。以下引用（現代仮名遣いで記載）

間もなく完成しようとしている東京天文台の敷地は、小さな沢地を隔て、深大寺の森と相対するような位置にある。一望快活な広大な高台で、殊に地平線の広いことと空気の清澄なことは、大天文台の敷地として、特にここが選ばれた所以である。昔の騎士の冑を逆さまにしたような赤道儀の大円塔の上や、本館の露臺の上からは、多摩彼岸の山々も、秩父の山も、その下にひらける地平線も、一望の下に集まってくる。殊に尾花の大きな名所として、私は、その広大な台地は勿論、台地をめぐる沢地も、細流の岸も、すべてが、白い尾花の波にうづもれて、それが夕日に輝く壮観は、たしかに武蔵野第一の景観である。それにあそこの月がよい、虫の音がよい。私はすでに六七回にもわたって新天文台をおとづれたが、ゆくたびにその景趣がかわり、そこに住む学者たちの話が変わっているのも、面白い。荒川沿岸には、まだかくれた薄の大きな名所があるが、広大な地平線をもつことにおいて、現在では、やはり天文台地が、武蔵野第一の秋草の名所とってよいのである。

と記されている。

今、国立天文台を訪れる人たちが、あるいは知ったかぶりに国立天文台を紹介する人たちが、国立天文台の森を、「武蔵野の面影を残す森」という表現をするが、この地はこの文章にあるように武蔵野の森ではなかったのである。日本には珍しく広大な高台の台地であり地平線と見まがう光景が広がった畑地の中にドームが点在していたのである。